

「ままごと」の新聞

newspaper of
mamagoto

「ままごと」の新聞」は、
柴幸男の作品を上演する団体「ままごと」が
不定期に発行する活動報告紙です。
発行日…2012年6月
発行元…ままごと

「街と演劇」

小倉と

北九州芸術劇場プロデュース

『テトラポット』

柴 幸男
Yukio Shiba

過去の公演について語るとき、いつも恥ずかしくなったり、苦しいような気持ちになります。なんだが、昔の恋人との日々を話しているようで。些細なことも大きな後悔につながったり、過剰な憧憬につながってしまったり。過去の出演者たちは、かつての恋人のようだし（男女問わず）、劇場や稽古場は、デートをしたお店や、同棲したアパートのようです。我ながら気持ち悪い。あと、実生活で同棲したこともないのに。だから、大抵の公演は、そうですね、1年ぐらいてしてから、あれは良い日々だったなとしみじみ思い出しますので、今、北九州のことを語るのには、やっぱり早すぎる。でも、新しい恋をする

ためには、過去を精算し反省することも大切だと思ふので、むしろありがたい作業だと思ふことにします。しかし、もうちょっとだけ脱線するのならば、なぜ僕にとつての過去の公演はすべて「失恋になつてゐるのか、公演の成功（それもよくわからないけど）」とも、あまり関係なく、どこまで行つても、僕にとつて演劇活動は、失恋活動です。

北九州に、滞在していたのは、今年の1月頃から2月末の約2ヶ月。僕は、その間、一度も東京には帰らず、北九州で過ごしました。ほぼすべての時間は稽古と執筆に費やされ、想像するだけでも、天国みたいな日々だったと記憶し

ています

北九州で覚えている場所を、思いつくまに。一番、記憶に残っているのは、モスバーガー。なんとまあ、がっかりの出だしですが、本当だからしょうがないです。多少、箸をつけるなら、ただのモスバーガーではありません。このモスは、普通のモスと違い、蔵を改装したような佇まいの店舗をしており、まあ、そんな感じです。稽古は北九州芸術劇場の稽古場でお昼から夜の8時まで。稽古前と稽古後はいつも、僕はこのモスバーガーにいました。市場と商店街から、一本横の、海へと続く紫川のほとりのこのお店で、僕は、毎日、コーヒを飲みながら、台本を書き、メールを読み、ラジオを聞き、ただぼーっとしたり、していました。印象深かった風景があります。北九州には雪がよく降ったのですが、積もることは一度もなく、粉雪が、強い風の中、舞い散るだけでした。僕は、よくこの粉雪を、モスのガラス越しに眺めていました。たぶん、そのときに、粉雪を舞台上にも降らせたいと思つたでしょう。「テトラポット」のラストシーンには、この粉雪のように、舞い散るだけで積もることはない、マリンスノーが、降り注いでいました。

深夜まで台本を書いたあと、本当にちゃんと

書いたあと、行つていたのが、このモスから100メートルほどにあった屋台でした。北九州にも、博多のような、屋台が、少しだけあって、全部、おでんの屋台なんですが、お酒はなく、おはぎがあります。その中に、とんこつラーメンを出している屋台があって、そこで夜食を楽しむのが数少ない喜びのひとつでした。って、ちよつと書いてて寂しすぎました。冬の夜、ビニールの壁しかない屋台の中は寒かったはずですが、いま思い出しても、おでん鍋のまわりは暖かく、となりのカップルや、酔ったサラリーマンや、大学生たちの、小倉の訛りが耳に心地よかったことが浮かびます。

いつだって俳優たちとお酒を飲むのは、それほど好きではなく、この北九州でも行つたのは1回か2回だけ。僕にとつて、彼らは、ずっと作品の世界の中の人たちであつてほしかったのだと思います。でも、彼らは、たぶん、生きて人間としてもつと接してほしかったんじゃないかと、今では思います。最高の作品を用意することだけが、僕にできる誠意だと思つて毎回、努力していたのですが、それが叶うことなく、ほとんどなくて、だから、いつも失恋のよう

に感じるのかもしれません。あと努力の方向が間違つてるような気がします。僕は、もつと俳優に開いて、作品をつくらなくてはいいけないのではないかと、そう考えはじめた、北九州の日々でした。

一番、気持ちの良かったのは、稽古場へ向かう途中、紫川の川沿いの道を、自転車走っていったとき。紫川は、きれいな川とは言えませんが、川面に光が反射して、目の前には小倉城と海と、工場と、劇場があつて、それだけあれば幸せだと、このときの僕は思っていました。



夜中までやってる小倉の屋台



蔵みたいなモス、中は普通



紫川と左に見えるのが劇場



劇場へと向かう途中にある市場

Yukio Shiba
82年愛知県出身。青年団演出部所属。日本大学芸術学部在学中に『ドドミノ』で第2回仙台劇のまち戯曲賞を受賞。2010年『わが星』にて第54回岸田國士戯曲賞を受賞、同年に劇団「ままごと」を旗揚げ。

from 福岡

「私と演劇」

寺田剛史（飛ぶ劇場）

9年前、北九州芸術劇場が出来ました。全国から沢山の演劇人がココ北九州に来るようになりました。柴さんとの出会いもココでした。私がまだ20代前半の演劇を始めたばかりの頃、「金が無かるうが野たれ死にそうだろうが演劇をやる」と今思えば意味不明な闘志に燃えていました。

しかし、30という年齢を境に僕の周りで演劇から遠ざかる人が増え、劇団を退団する人との別れもありました。そんな頃から「何があつても演劇をやる」から「演劇を続ける為には何をすべきか」と変わりました。そう思うようになるまでに16年。

そして永く演劇を続けていると、嫌でも「寺田さん」「寺田先輩」と言われるようになってしまっています。とつても嬉しい事ではありますが同時に責任感も出てきますでしょ？北九州の演劇を背負っていかねければならないという使命感？湧いてきますでしょ？

結婚もしました。子供もいます。裕福な生活ではありませんが、家族を養いながら演劇を続けています。今は。

そんな生活環境であつてもありがたい事に、北九州を拠点に北九州では無い場所に俳優として呼ばれ、その土地に滞在し作品を作る事も時折あります。

そして私の活動が、これから演劇を続けて行く若者達へ「何処に居たつて演劇はできる」というメッセージと希望になつてくれればいいな、と思います。

近年演劇も進化し続けているようです。その進化について行けなくなった時、私は演劇をやめます。進化し続ける者だけが生き残る。大げさかと思いますが、そうなのだと、今日では思います。



てらだ・つよし 76年福岡県出身。98年に「飛ぶ劇場」に入団。柴作品には『合唱交響曲わが星』『テトラポット』に参加。